

「手書きの妖精」

娘がまだ幼い頃、ふたりでよく絵本を楽しんだ。

ある日、――乳歯が抜けたら、それを枕の下に置くこと、すると寝ている間に妖精がやってくる。――と、歯を持っていく。大人の歯を作る材料だから、4ツノも置いていってあげる。――そんな可愛いエピソードを知って、私は実行することにした。

子供がすっかり寝ついてから、歯と50円玉を入れた替え、妖精になった私は手書きのカードも添え置いた。

翌朝、娘がたどたどしい口調でカードを読んでいる。しかし子供というものは大人が思っているより子供ではなかった。――アレ？と、いうふうな顔をしてカードをじっと見つめていた。――「マスイ！　そう思っただけで、次回には筆跡がわかりにくいだろうかとカタカナ文字にしてみた。」

娘は「また50円を買ってもらって、と笑顔で



見せていたが、後年に取って、それは親への  
 気遣いだったと打ち明けられる。

「だって字がママのにそっくりだったもん  
 」「それに金額も50円だったり10円だったり、  
 バラバラだったしね」  
 立て続けに抜けた時  
 にちよつとケケっただのもマズかったか？

子供は小さな大人なのだ  
 と誰かが書いていた。色々と見抜いているし、  
 子供たちの知恵も働かせている。

子供の夢をこわさないために、誰か手書きの  
 妖精文字を考えて下さいますか？  
 だって活字には味気ないじゃないですか。

ひよつとすると、サンタさんの正体がバレた  
 のも、あの手書きのクリスマスカードのせい  
 だろうか？